



— 里親制度を知り、動きだすまで —

不妊治療が上手くいかなかったときに、病院の先生から里親制度の話を伺いました。妻は乗り気になりましたが、自分は「他人の子を育てる」ということに抵抗を感じ、子育てする自信が持てませんでした。そんな中でも妻はいくつか書籍を読み「自分で子育てしてみたい」「親に孫を抱かせたい」という気持ちが強くなったようでした。そして、親や親戚に話しをすると、みんな賛成してくれ、それならばと里親登録に向けて動き出すことになりました。

— 里親制度は誰のため？ —

研修を受ける中で「制度は親のためではなく、こどものためにある」ということに、とても悩みました。当初の目的は自分たちのためのものだったからです。そのことで悩んでいるときに、ある先輩里親さんに「こどものために何かしてあげられるなら、関係はウインウインじゃない？」と言われました。その話を聞いて、悩みが吹っ切れました。

— 委託を待つ間 —

息子が我が家に来る前、2組の兄弟をふれあいフォスター事業を通して受け入れました。初めは沈黙でした。双方のキャッチボールが上手くできず、このまま過ぎていくのかと不安にもなりました。しかし、時間と共にこどもの方から夢や学校のことを話してくれるようになりました。そして、町を歩くとおんぶや抱っこを求められ、日ごろと違う経験をすることができ、楽しく過ごすことが出来ました。ただ、一緒に生活していても、ちょっとした行動で「甘えたい」という気持ちを感じられました。施設での暮らしは、友達や生活には何の不自由もないと思いますが、家庭でしか得られないものがあるのではと感じることもありました。

—息子との生活—

ある日突然、児童相談所から「0歳の男の子を受け入れてもらえないか」と連絡が来てから、あれよあれよと受け入れに向けて話しが進みました。そして何度か面会をした後、1泊で我が家にお泊りに来ました。私たちは初めてで不安の多い2日間でしたが、息子はミルクをあげたり、オムツ交換をしたりと身の回りのお世話をするくらいしか手がかからず、夜泣きや、訳も分からずグズルということがありませんでした。

1泊のお試しだったのであつという間に乳児院に帰ったのですが、その時に妻は「かえってしまった」と涙ぐんでおり、自分たちにとって、すでに“大切な子”となっていることに気が付きました。それからスムーズに我が家での生活が始まり、今では活発に走り回って悪戦苦闘しながら日々、楽しくにぎやかに過ごしています。

—真実告知と実母さんへの思い—

真実告知については、何歳までに話すのか、未来永劫隠し通すのか等、正解がないものだと思います。そんな中で、自分たちは、早くから伝えたいと思っています。それは、はじめは実親さんに対して「なぜ自分で生んだのに育てないのか」と怒りを感じていました。ただ、息子の名前を見たときに「この子に明るい未来が来て欲しい」という実母さんの思いを感じました。

実母さんはただ手放しただけではない、この子の明るい未来を願っているんだという気持ちを感じると、こどもを生んでくれたこと、育てるきっかけをくれたことに感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、息子にはそんな実母さんのことをしっかり伝えてあげたいと思うようになりました。まだまだ先は長いですが、息子と共に、人生を歩んでいきたいと思っています。

